



Department of Orthopaedic Surgery
Graduate School of Medical Science
Kanazawa University

[国外留学]

出向・留学便り

サンディエゴ留学記 五十嵐健太郎

ロチェスター大学留学記 横川 文彬

[海外フェローシップ・短期留学]

AOSpine fellowship 吉岡 克人

ドイツ・テュービンゲン留学記 藤田 健司

[国内出向]

京都出向だより 白井 寿治

国立がんセンター中央病院 出向便り - Part 6 - 丹澤 義一

名古屋市立大学出向便り 2017 三輪 真嗣

【国外留学便り】

University of California, San Diego 校

五十嵐 健太郎

(平成 19 年入局)



サンディエゴ留学記

はじめに同門の先生方のご支援のもと、海外研究留学という大変貴重な経験をさせて頂いている事、深く感謝致します。私は平成27年10月よりカリフォルニア州サンディエゴにある University of California, San Diego 校 (UCSD) に留学させて頂いております。渡米以来1年半が経過し2回目の留学報告になります。

サンディエゴはアメリカ西海岸南端にあり、トランプ大統領の「壁を作る計画」で話題の「メキシコとの国境」の町です。日本での報道内容を見ると、東海岸の大都市におけるトランプ大統領に対する大きなデモや衝突が強調されているようですが、留学便りを書いている2017年3月現在、ここサンディエゴでは暴動が起きたりといった恐ろしいことも無く、大統領が変わったことによる日常生活上の変化を感じることはあまりできません。

研究

UCSD 外科の教授である Hoffman 先生が経営する AntiCancer Inc. というラボで研究をさせて頂いています。2001年に初代となる山本先生が留学されて以来、金沢大学からの留学は私で6人目となり、先輩の先生方の大きな業績により Hoffman 先生の金沢に対する信頼は非常に厚いものとなっています。

先代の三輪先生まで、癌細胞に蛍光蛋白を発現する遺伝子を導入し、癌細胞の生体内での動態を可視化して観察するという非常に先駆的な手法を用いた研究が大きな柱となっていました。しかし蛍光イメージング技術の一般化に伴い、新規性のある研究をすることが徐々に難しくなっています。そこで Hoffman 先生が現在注目しているテーマである①がんに対する細菌治療②患者由来腫瘍を用いた肉腫の個別化治療③がんの代謝を利用した治療、を中心に研究を行っています。

中でも、ロサンゼルスにある UCLA との共同研究である、「患者由来腫瘍を用いた肉腫の研究」がメインとなっています。軟部肉腫症例数全米第3位を誇る UCLA から送られてくる患者腫瘍をヌードマウスに移植し、育った腫瘍に対し何種類もの薬剤を用いた治療を行います。マウスに腫瘍を移植して、薬を投与するという非常にシンプルな実験のため、特殊な技術や斬新な発想が無くとも実験は進められます。先輩の先生方の論文を読むにつけて、私自身の発想の新規性に乏しいことが心に引っかかるのですが、実際に実験を行うと、思いもしなかった薬剤の組み合わせが治療効果を発揮することもあり、再発した患者さん達にどの薬が効きやすいかといった結果が還元できる実験でもあるため、気合が入ります。

生活

サンディエゴは留学している日本人が多く、子供たちを介したコミュニティもできあがっており、様々な分野の研究者や駐在員と仲良くなれます。アメリカの小学校に子供を通わせている親達にとって「日本語と日本文化をいかに子供たちに伝えるか」は共通の悩みです。放っておいても英語が上達し異文化コミュニケーション能力を伸ばせるのは喜ばしいのですが、日本人としてのアイデンティティを育てる努力が必要になってきます。そのため毎週のように集まって子供対象の日本語勉強会を行っています。その他に今年は皆でそれぞれ「おせち」を作って持ち寄り、元旦を祝いました。私は金沢代表としておせちではないのですが「蓮蒸し」を作って持って行ったところ、なかなか好評でした。普段家庭でなかなか作らない日本の伝統料理とその云われを伝える良い機会となりました。

AAOS

今年の AAOS はサンディエゴで開催され、金沢からは土屋教授、富田名誉教授夫妻をはじめ多くの同門の先生方が来られました。会場のコンベンションセンター周囲は AAOS と日程を同じくするワールドベースボールクラシック北米南米予選が隣接するペコトパーク野球場で開催され、大混雑で大変な盛り上がりとなっていました。

サンディエゴにも慣れ、特にホームシックにかかることなく研究生活を送っているつもりでしたが、久しぶりに金沢の先生方とお会いすると、やはり元気が出ます。そろそろ留学させて頂いて以来2年が経過しようとしているところですが、先輩の先生方の背中を追いかけながら全力で研究生活に邁進したく思っております。

最後になりましたが、今回の留学に際しご尽力を頂いた土屋教授をはじめ、快く送り出してくださった医局の先生方並びに同門の先生方にこの場をかりて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



AAOS の際、アンチキャンサーの前で記念撮影



記念撮影のため、おせちの前でお預け状態の子供たち



【国外留学便り】

ロチェスター大学

横川 文彬

(平成 20 年入局)



ロチェスター大学留学記



Schwarz 先生

平成28年1月よりニューヨーク州のロチェスター大学に留学させていただいており、現在は専ら基礎研究に従事しています。ロチェスター大学の整形外科、筋骨格系研究センターは毎年多くのgrantを獲得している全米屈指の研究施設であり、センター長であるSchwarz先生の2016年NIH助成金獲得金額は、整形外科領域でなんと全米No.1だったらしいです。そのSchwarz先生直属の感染チームで研究できたことは本当にラッキーでした。まずはこちらでの私の研究内容についてご紹介させていただきます。

MRSAによるインプラント感染後のインプラント交換モデルマウスにおける

抗グルコサミニダーゼ受動免疫療法の効果

わかりづらいタイトルかと思いますが、端的に言いますと、インプラントMRSA感染の“新しい治療法”を見つけた、というものです。実臨床での治療を模倣するため、まずはインプラント感染モデルの作成から始まり、感染成立後に洗浄、デブリ、インプラント交換など、いわゆるrevision手術を行ったのち、治療薬の効果を検証しました。グルコサミニダーゼは黄色ブドウ球菌の細胞分裂や細胞壁のリモデリングに必須の酵素であり、これに対する抗体によってMRSAの正常増殖が阻害されます。今回のモデルでは、抗体療法単独での治療効果は十分ではありませんでしたが、抗菌薬との併用による相乗効果を見出すことができました。

週に1度のラボミーティングでの経過報告、3,4ヶ月毎のセンター全体での口演(30分間)など厳しい環境ではありましたが、結果的に短期間である程度期待された成果を出



筋骨格系研究センターでの30分talk

すことができ、アメリカ整形外科基礎学会で発表する機会にも恵まれました。こちらで習得した知識や手技、経験を是非これから金沢大学に還元したいと考えています。

ロチェスターでの生活

冬は極寒、夏は軽井沢。

そのように伝え聞いていましたが、私の滞在中は比較的暖冬で、夏はかなり暑かったです。クーラー不要というよりは、扇風機で我慢したという感じでした。それでも家族で過ごすロチェスターでの生活はたいへん楽しく、ニューヨークシティーやワシントンなどの近隣都市にもよく遊びに行きました。大統領選挙という大イベントもありましたが、私たちへの影響は少なく、総じて危険な目に逢うこともなく留学生活を終えることができそうで安堵しています。ただ、留学中の失敗、特にお金のトラブルはいくつもありましたので、少しだけ紹介させていただきたいと思います。

失敗談① 為替

私の留学が決まった当時の為替相場は1ドル＝101円。そして、半年後の留学開始時には1ドル＝123円。すでにかなり損した気分です。というのも、留学先からの給料は無く、日本の貯金からの送金頼みであったため、出来るだけ円が強い方(円高)が良いわけです。幸い、留学開始後より少しずつ円高の方向に進んでいたため、為替相場を逐一チェックしながらベストのタイミングを見極め、1ドル＝117円でチャンスとばかりにまとまった額を送金。がしかし、そこからあれよあれよという間に1ドル＝100円切り…。ウン十万円の損失です。それ以来、為替はみないようにしています。

失敗談② ミニーマウス

初めてNYのタイムズスクエアに訪れた時のことです。娘の大好きなミニーマウスが近づいてきました。これは写真をとらなければとカメラを構えたところ、どこからともなく別のミニーマウスたちが集まってきて、これはマズイと感じながらも皆で集合写真。案の定、写真を撮ってくれたオジサンから“20ドルだ”とお金の請求。よくよく聞くと、ミニーマウス1体につき20ドル。あまりお金を所持していないことを告げると、“よくみろ。そこにATMがあるじゃないか”としつこく催促。子供の夢を踏みにじられたことに憤慨しながらも、仕方なく10ドルだけ手渡して逃げました。ミニーマウス(複数形)は要注意です。



NY タイムズスクエアにて

失敗談③ Tokyo(NRT)とTokyo(HND)

VISA更新のための一時帰国を終え、アメリカへ戻る際の出来事です。東京で前泊し、フライトの事前チェックインを済ませ、ホテル発のリムジンバスで余裕を持って1時間半前に成田空港に到着。

平日だし空いてるなあ，ラウンジでゆっくりしようかなどと考えながら荷物を預けようとしたところ，“お客様…このフライトは羽田発ですね…”．*Oh, my god*… 痛恨のミスに失望しながらも，奇跡を信じてタクシーに乗り込みました．成田から羽田まで約90km．煽りながらの時速140kmの危険運転と，同じく猛スピードで上がっていくメーターに恐怖を感じながら，あっという間に羽田到着．奇跡は起こりました．が，その代償は大きく，タクシー料金は25,000円越え．そして，何を隠そう前泊場所は品川でした．

いろいろとお金の失敗はありましたが，こちらで得られた経験，思い出はプライスレスであり，今後の私の人生にとって大きな財産になるものと確信しています．改めまして，本留学の機会を与えてくださった土屋弘行教授，村上英樹准教授，そして医局，同門会の先生方に厚く御礼申し上げます．

[海外フェロースhip・短期留学]

University Hospital Motol

吉岡 克人

(平成13年入局)



AOSpine fellowship

AOSpine fellowshipは年に10人程度アジアから選ばれる制度で，最近では加藤先生や笹川先生が選出されています．来年は林寛之先生が選ばれており，期間や時期もある程度自由度があるので比較的応募しやすいfellowshipではないかと思います．今回私は，①脊椎前方の手術が多い，②外傷が多い，③日本人がまだ誰も行ったことがない，という条件を満たす施設を探しました．南アフリカやクウェートという選択肢もありましたが，そこまでの勇気はなく無難にチェコを選ぶこととなり，ベルリンで開催されたEurospineへの学会参加に合わせて，10/9から29まで3週間をプラハで過ごしました．

チェコ共和国はEU加盟国ですが，ユーロの導入はなくチェココルナという通貨を使用しており，チェコ語は西スラブ系であるため(ロシア語に近い)全く理解できず，さらに街にも旧共産圏の雰囲気が残っており過去に訪れた英語圏の国とはかなり異なります．宿舎は病院の敷地内で，病院の表示の多くはロシア語も併記されており，「東欧だな」と思わせるに十分な第一印象でした(spine teamの一人はロシア人でした)．10月ともなるとかなり寒かったですが，プラハの町は非常にきれいで安全なため，とても過ごしやすかったです．夕飯時には毎晩ビールを飲み(1杯200円以下で水より安い)，人生初のオペラ鑑賞(1000円！)もしました．



Spine teamと病棟で(左がProf. Jan Štulík)

Spine centerのトップは42歳という若さで教授になった(当時チェコで最も若くして教授になったらいい)Prof. Jan Štulíkです。現在49歳であり、スタッフも30-40代で若く、活気があり楽しいメンバーでした。毎朝集合は朝7時で、回診をし、その日の手術のcase conferenceがあります。外傷も、変性疾患もほぼstrategyが決まっているため、15分程度で終わります。研究についてのカンファレンスはなく、抄読会やフェローへのレクチャーもなく、臨床一筋という印象でした。スタッフが3人、フェローが5人の体制でしたが、週に25-30件ある手術の7割くらいを教授が執刀していました。前方固定は頸椎も胸腰椎(外傷)も手技が確立されており、非常に早く1時間以内に終わります。8:30から3件手術して2時過ぎには予定手術が終わってしましますが、夕方から外傷の急患手術が毎日(土日も)あり忙しそうでした。ところがある日、朝8時から皆でシャンパンを飲み始め、「なぜ？」と聞くと「水曜日からたまにね。」との返答。理解不能でしたが、羨ましい限りです。「ヨーロッパでCheky(チェコ人)と言うときはindisciplined(無規律な、自制心のない)」という意味なんだ」と教授に言われなんとなく納得してしまいました。もちろんその日も小児の脊椎腫瘍や、頸椎の後方固定など5件の手術をこなしていました。しかしながら、Prof. Jan Štulíkは仕事に対しては完璧主義者であり、手術も常にパーフェクトでないと納得せず、治療に対するぶれない姿勢に感銘を受けました。また骨移植、骨癒合へのこだわりが強く、経過で偽関節っぽい画像だと、全く臨床症状がなくても、後方前方からガッツリやり直していました。「画像上はまだくっついてないかもしれないけど、無症状で不安定性もなさそうだからしばらく経過観察でいいのでは」とはとても言えない雰囲気でした。普段あまり遭遇することのない外傷が多くとても勉強になりましたが、滞在中唯一辛かったのは、1対1で話をするとき以外は完全チェコ語だったことです。Spine teamのメンバーはとても親切で優しく、いくつかの単語を覚えて披露すると喜ばれましたが、疎外感を覚える場面も少なからずありました。しかしながら、最終週には多椎体TESの臨床成績に関するプレゼンテーションもさせて頂き、活発なディスカッションができ有意義な時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、医局員の皆様、並びに同門の先生方には不在中大変ご迷惑をお掛けしました。この場をお借りし、心より感謝申し上げます。



送別会

[海外フェローシップ・短期留学]

チュービンゲン大学

藤田 健司

(平成20年入局)



ドイツ・チュービンゲン留学記

平成29年1月末よりドイツのUniversity of Tübingen, BG Klinik(チュービンゲン大学BGクリニック)に臨床留学させていただいております。日本リウマチ学会より助成金をいただき、海外研修の機会を得ました。渡独してまだ1か月半であり、チュービンゲンでの生活・BGクリニックの紹介を中心に報告させていただきます。

チュービンゲンって？

ドイツ南部にある人口8万人超の小さな町です。緯度は48度で、北海道のてっぺんの宗谷岬(緯度45度)よりまだ少し北であり、もちろん寒いのでみんな厚着です。3月上旬の現在はだいぶ寒さが和らいできたところです。町の中心部は中世の面影が残り、とても美しい町です(写真1・2)。チュービンゲン大学は創立1477年で古くから大学町として知られ、人口の4割が大学関係者であり、若者が多く活気があります。ドイツ出発前にベルリンのクリスマス・マーケットでのテロが報道され、治安について心配になりましたが、この田舎町とは無縁できわめて平和な印象です。



写真1: 2月末日・早朝、バス停にて



写真2: ネッカー川沿いの街並み、多くの若者が川沿いに座っている

生活

異国で生活を開始するにあたり困難なことのひとつがアパートの契約だと思っていました。色々調べた結果、“Airbnb”を利用しました。これは、現地の人と個人間で部屋・アパート・一軒家を賃貸するという、“民泊”を仲介するサービスです。2008年にアメリカからスタートし、世界中に爆発的に普及し、金沢にも多くの宿泊施設があるようです。ホテルを予約する感覚で、非常に簡単に、アパート(家具付き・ネット付き・電気代/水道代込み)の契約ができました。もちろん普通のアパートに比べると割高になるとは思いますが、自分でこれらすべてを用意すると思うと気が遠くなります。おかげでチュービンゲン到着翌日から病院に行くことができました。

車がないので、交通の便を重視して、町の中心部のアパートに住んでいます。観光スポットであるチュービンゲン城まで歩いて1分です。金沢でいうと片町に住んでいる感じだと思いますが、アパート含めて周囲の建物はとても古いです。アパートの共用の洗濯室が地下にありますが、まるで防空壕のようで驚きました(写真3)。



写真3：アパートの地下の洗濯室

パン・ハム・ソーセージは、安くて美味しいです。ただ、1か月以上つづくと少し飽きてきて、寿司やラーメンが恋しいです。アジアンショップで日本の食材・調味料が買えますが、日本の3倍ほどの値段がするので少し贅沢品です。あと、ビールが明らかに安いです(1本500mlで1ユーロ弱(約120円)ほど)。さすが本場です。

BGクリニックについて

チュービンゲン大学BGクリニックにて、主に手術の研修をしています。当施設はドイツでも有数の外傷センターとして知られており、主任教授のStöckle先生は外傷(特に骨盤骨折)で世界的にとっても有名な方です。整形外科医はスタッフとレジデントあわせて、約30-40名いるようです。自分のボスのSchröter先生(写真4)は、膝骨切り術のスペシャリストで、世界各地に講師として呼ばれています。膝骨切り術・関節鏡手術を中心に、膝・肩・足のいろんな手術を行っています。膝骨切り術に関しては、一般的な高位脛骨骨切り術に加えて、大腿骨遠位骨切り術や、高度変形に対するdouble level osteotomy(大腿骨・脛骨の骨切り術の組み合わせ)など、高度な骨切り術を得意とされています。日本人医師を継続的に受け入れていただいております。兵庫医科大学・中山寛先生、横浜市立大学・赤松泰先生に続いて、自分は3人目になります。とても親切にいただいております。感謝してもしきれないほどです。また、前任の赤松先生と2週ほどの引継ぎ期間があり、あらゆることをアドバイスいただけて、スムーズに研修をスタートすることができました。

手術室は、整形外科だけで10部屋あり、約40件/日ほど、毎日ものすごく多くの手術を行っています。私の所属するチームは週4日が手術日(週1日だけ外来日)であり、朝8時から夕方までずっと手術室に

います。2部屋で約8件/日の手術を行っており、自分は主に第2助手として約4件/日の手術に参加させていただいております(手洗いをして直接参加できるのがドイツの魅力です)。高度なテクニックから小さなコツまで学ぶことができます。人手不足のときなどは執刀医と自分だけで手術を行うこともあり、うれしい限りです。

ほとんどの医師は英語が堪能です。ドイツ語はまったくわかりませんが、自分にはゆっくりとした英語で話しかけてくれます。手術の助手をする分には、手術の状況と単語でなんとなくわかりますが、英語力がないと細かい事を聞きたくても上手く聞けないのが困ったところです。また、ティッシュ(台)、ハウト(皮膚)、ナート(縫合)、ワッテ(綿)、シーネ(装具)、ヴァッサー(水)などは、もともとドイツ由来で日本でも使っている単語であり、手術室でしばしば聞こえますので少しうれしくなります。

異国での生活・研修はすべてが新鮮であり、刺激的な毎日です。ドイツ・チュービンゲン大学に留学できたことを幸せに思います。最後になりましたが、このような大変貴重な機会を与えていただいた土屋弘行教授・加畑多文准教授、およびSchröter先生を紹介していただきました中村立一先生をはじめ、医局の先生方・同門の先生方に、心より感謝申し上げます。限られた時間の中で多くを吸収して、日本での診療に生かすことができるよう、精一杯がんばろうと思います。



写真4：ボスのSchröter先生、前任の横浜市立大・赤松泰先生とともに

【国内出向便り】

京都府立医科大学

白井 寿治

(平成8年入局)



京都出向だより

皆様こんにちは。ご無沙汰しております。京都に勤めて、まる6年が経過しました。6年とはこんなに早く経過するものだろうかと感じるほど、転勤してきた日がついこの前のように感じられます。小学生の6年間はとても長かったのに・・・京都への転勤について教授室で話をしていたときを今でも忘れません。6年前の3月11日でした。急に大きな揺れが教授室を襲いました。そうです、東日本大震災です。医局でテレビをつけると映画のCGのような津波が海岸線の町を襲って、なにもかも飲み込んでいました。京都生活について話していたところの出来事でしたので、新天地での生活がすごく不安に思えたのを鮮明に覚えています。あれからもう6年です。そのような心配をよそに、京都での生活は周囲の人達もとても親切でやさしい方ばかり、都会過ぎない都会で利便性も良く、充実した日々を送っています。車は駐車場代が月4万円程度するので、金沢の自宅に置いたままで、毎日自転車生活です。とても良い運動になっていますが、雨の日、真夏、真冬がとてもつらいです。そういえば私が小さい頃は女性が車をあまり運転していなかった時代で、母も毎日自転車で職場に通っていたことを思い出します。雨の日も風の日も一言も文句を言わず、母の凄さを今自分が自転車生活になった今、実感しております。京都市内のお母さんたちも電動自転車に2つも3つも子供用シートをつけて送り迎えをしているのをよく目にします。京都文化の一つでしょうか。母は偉大ですね。子供の頃はそのありがたさに気付きませんが・・・また、京都生活で他にづらい点といえば物価が高いのと家族がそばにいないことです。小学校6年生だった長男が、4月からは高校3年生になってしまいました。それを思うと6年とはすごい年月だな～と思います。当初は1年半程度の交代制人事異動の予定でしたが、久保教授の意向もあり、そのまま京都府立医大勤務となりました。一人暮らしでつらいですが、そのぶん、久保教授ならびに土屋教授にはたくさんご配慮いただき、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、腫瘍班は後期専攻医と大学院生の2人と、府の人事のため南丹病院に出向している1人が入班したことにより全部で8人(寺内先生、土田先生、佐藤先生、溝尻先生、森先生、林先生、勝山先生そして私)となりました。実質大学内には6人ですが、おかげさまで少しずつ人数が増えております。所帯が大きくなるとますますチーフである私が頑張らないといけなくなり大変です。基礎的研究では溝尻先生が腫瘍班初の学位を3月に取得しました。また森先生は学位論文が先日アクセプトされました。順調に教育の場として腫瘍班が根付いてきているのを実感します。また次の大学院生である林先生の実験内容も「プリステメリンの抗腫瘍効果」で決まっており、先日寺内先生が基盤Cを獲得し、研究体制が整いました。佐藤先生は形成外科的な再建術に興味があり、7月からは国内留学する予定で

います。手外科中心に現在活動している土田先生は上肢腫瘍を担当してもらっており、学術的なサポートもお願いしています。勝山先生は外病院で臨床的な技術とセンスを磨いています。皆のがんばりで昨年は108件の手術を大きなトラブルなくこなすことができました。悪性骨腫瘍が11例、悪性軟部腫瘍が20例ありました。しかしながら、臨床試験の自粛に伴い、液体窒素処理骨移植術は2例、コードコーディングインプラント挿入が2例と少ない症例数であり、来年度はもう少し積極的に臨床試験症例を増やしたいと考えています。学会活動も積極的に行い、国際学会7題(シンポジウム1題)、国内学会16題(シンポジウム3題)発表しました。しかしながら国際学会を発表しているのが私や寺内先生であり、できれば若い先生にたくさん海外学会を経験してもらいたいと考えています。来年度はさらなる飛躍に向け精進したいと思います。

これからさらにどれほど京都勤務が続くかわかりませんが、2つの医局の発展に貢献できるよう全力で頑張っていきたいと思います。また、個人的には、素直な心で衆知を集め、「夢、挑戦、実現」を達成できるよう来年、再来年と励んでいきたいと思っています。今後とも宜しくお願い申し上げます。



左から、溝尻先生、土田先生、勝山先生、森先生、寺内先生、林先生、私、佐藤先生

【国内出向便り】

国立がんセンター中央病院

国立がんセンター中央病院 出向便り — Part 6 —

国立がんセンターの丹澤です。2012年春に不安いっばいで上京してからはや5年がたちました。気づいたらこれまでローテーションしたどの病院よりも長く勤務していることに驚きを感じているこのごろであります。

さて、昨年度を振り返ると仕事はもちろんですが、仕事以外のいろいろなことに挑戦した1年であったという思いがします。まずはスポーツ活動として卓球大会に出場しました。国立がんセンター中央病院では職員親睦の一環として昨年から卓球大会が始まりました。我ら骨軟部腫瘍科からも若手ドクターやナースを集い出場することとなりましたが、第1回大会には私は体調不良で参加を断念していました。今年の大会には、腰痛をかかえながらもなんとか参加することができました。参加にはチーム内にOver Age(40歳以上)1名と女子1名が必須で4名1組でダブルスを行います。我々は希少がんセンターのメンバーということで希少がんチームというチーム名で3チーム参加しました。私はもちろんOver Age枠での出場となりました。有志で卓球台を購入し、仕事の終わったものからリハビリ室に集まり練習に励みました。選手の中には2万円以上するラケットを購入したメンバーもあり、私も生半可な気持ちではできないと練習に熱を入れました。しかし卓球は遊びでやったことがある程度で経験がほとんどなかったもので、試合前はリオオリンピックで活躍した水谷選手のハイライト映像を見てイメトレまでして試合に臨みました。本当に久々に試合前の緊張感を味わい、学会発表とはまた違うプレッシャーを感じました。予選では運悪く卓球経験者のいるチームと対戦することとなり、グループリーグ2位での勝ち上がりとなりました。本戦では希少がんチーム同士、お互い手の内を知り尽くしたものの対戦となりました。どちらかしかベスト4に進出できない状況でお互い死力を尽くしたまさに死闘の末、自分らのペアは1点差のゲームをものにしました。どちらが勝ってもおかしくなかったとお互い健闘をたたえあいました。残念ながら我がチームは勝ち点差でベスト4には進めませんでしたが、2位グループ中の1位となり5位という結果でした。しかし残りの2チームは順当に勝ち上がり、ワ

丹澤 義一

(平成12年入局)



ンツーフィニッシュを飾りました。仲間と共に練習し共に闘えたことは、我々のチームワークをより強くすることができたと思います。自分にとって大変思い出深い大会となりました。

続いて東日本整形災害外科学会ではフットサル大会に参加しました。こちらの大会もOver age枠での参加で、サッカー経験者でない私はキーパーで出場させていただきました。チームはやはり大学チームがほとんどで、日整会サッカーの出場メンバーが中心のようでした。我々ががんセンターチームは自分以外は各大学の精鋭でチームを固めました。チームメートの奮闘のおかげで準決勝まで進みましたが、優勝はかないませんでした。非常に悔しい思いもしましたが、真剣なゲームを久しぶりに体験し、大学時代を懐かしく思い負けても清々しさを感じることができました。

さらに芸能活動においてもメンバー一丸となって取り組みました。これまで国立がんセンター整形外科を引っ張ってこられた中馬広一先生が退官されることとなり、その送別会において我ら一同芸を披露いたしました。Chuman先生ということでPerfect HumanならぬPerfect Chumanと題して、オリエンタルラジオ(RADIO FISH)のダンス、そして中馬先生にちなんだ替え歌で盛り上げました。その前座としてピコ太郎ならぬピコ丹郎のパロディーを私、丹澤が中馬先生に捧げました。こちらについても仕事後に皆で練習を行いダンスに磨きをかけ、私もピコ太郎の衣装を準備し、ビデオ撮影と本番でのダンス練習に励みました。本番では中馬先生には大変喜んでいただけたご様子で、最後皆に高々と持ち上げられFinishしました。

このように仕事もせずがんセンターで何をやってるんだと思われても仕方ありませんが、こんな活動もチームワークを育むという意味ではとても重要なのではないかと思います。我々ががんセンター骨軟部腫瘍科のメンバーは出身医局がバラバラで、正直まとまりのない集団です。このような形でメンバーの絆を深めることができれば、共によい仕事もできるのではないかと感じています。蛇足ですが、昨年秋がんセンターのメンバーと鹿児島県の学会に参加した際、念願であった知覧特攻平和会館を訪れました。日本男児としての魂を我が身に注入することができ、またこれを皆で共有することができて大変有意義な機会となりました。

この4月からがんセンターで6年目を迎えますが、金沢大学整形外科学教室を見本にチーム一丸をモットーにまた新しいメンバーと共に前へ進んでいきたいと思います。今後も土屋教授をはじめ同門の先生方にはご指導賜りますれば幸いです。



写真1. 卓球大会にて



写真2・3. 国立がんセンター中央病院骨軟部腫瘍科科長 中馬先生送別会にて



【国内出向便り】

名古屋市立大学

名古屋市立大学 国内出向便り 2017

三輪 真嗣

(平成 15 年入局)



1. 診療について

2016年4月から名古屋市立大学整形外科の腫瘍グループで勤務させていただいています。名市大の腫瘍グループは大塚教授と10年上の山田先生と私の3人で外来をして、病棟や手術については山田先生と私の2人で診療しており、手術日は手の外科グループの大学院生が手術に入ります。金沢に比べると腫瘍グループの人数が少ないため病棟も外来も忙しく、患者さんの急変時には対応に困ることもありますが、スタッフが少ないということは手術で執刀の機会が多くなるというメリットもあり、腫瘍の手術の経験を積むことができます。手術日は週に1日だけですが、1日に平均4件、多いときには6件の腫瘍症例の手術をしています。手術が終わると麻酔科Drが麻酔を覚まし、患者さんはすぐに手術室から退室してrecovery roomでしばらく過ごしてもらいます。患者さんが退室するとすぐに清掃専門のスタッフが手術室に入り、すばやく片づけをして、看護婦さんは次の手術の準備にとりかかります。患者さんが退室してから次の患者さんの入室までは15～20分くらいで非常に効率よく手術室を使っており、この点では北陸の病院も見習うべきだと思います。

金沢大学と名市大では、主となる術式が異なることがあるのは当然ですが、皮膚切開のライン、生検での術中迅速病理、抗癌剤で用いる薬剤など、様々な点で異なるところがあります。金沢流、名市大流のどちらが正しいということはなく、それぞれのやり方に利点、欠点があり、優先することが異なるということになります。このように、2つの施設の方法を知ることで、様々な手技についての利点や欠点を再確認できています。

病棟はできるだけ医師に負担がかからないようなルールになっています。金沢大学では入院患者の相談は基本的に主治医に電話で連絡されることが多いのですが、名市大では時間外に患者さんに問題が起きると、看護師から当直医に連絡、相談され、夜間や休日は大学病院から担当医に電話がかかることはほとんどありません。プライベートな時間はきっちり仕事から離れるという、都会らしいシステムですが、状態が悪化していても主治医に連絡がないこともあり、この点については金沢大学の方が安心です。

2. プライベートな時間について

腫瘍班は2人しかいないので平日は外来や病棟で大忙しですが、夜や週末は自由に時間を使うことができるため、早めに帰宅して子どもと過ごすことができます。私の場合は夜にデスクワークに集中すると眠れなくなるので、子供と同じ時間に寝て、早朝にデスクワークをするようにしています。週

末には名古屋市科学館、水族館、東山動物園など出かけるところは多く、まだまだ行くべき週末スポットが残っています。

北陸から離れてはじめて気がついたのですが、スーパーで売っている魚は北陸の魚に比べると明らかに味が劣り、スーパーで刺身用の魚を買うことはほとんどなくなりました。ただ、金沢の大手回転寿司のもりもり寿司が名古屋にもあるため北陸から直送のおいしい魚を食べることができますが、当然長い列を待たなければならず、名古屋で北陸の魚のありがたさを感じています。

3. 研究・論文について

名市大は教育や研究にも力を入れており、病院業務以外に多くのデスクワーク（論文や研究費の申請や報告書類、学会や出版社からの依頼原稿の執筆や査読）があります。また、大塚教授は学会や出版社から多くの執筆依頼がきますが、この1年間で大塚教授の論文8本の執筆に関わらせていただき、そのうち6本で筆頭筆者にさせていただきました。業績が増えれば今後の研究費獲得に有利になりますし、名市大で多くの仕事をする事で数年後に金沢大学に貢献できると信じてがんばっています。

4. おわりに

予定ではあと1年間名市大で勤務させていただくことになっており、名古屋で多くの経験を積んで来年の春には胸を張って北陸に帰れるようがんばりますので、今後ともご指導のほどよろしく願いいたします。